

カウントダウンシリーズ 6

ダーウィンの ブラック・ボックス



Forever Friendship with God!!

永遠の友情の発見

混迷の世紀末、大世紀末を迎え

いよいよ新しい世紀、新しい千年期に向けてのカウントダウンが始まった

いま 来るべき未来に向けて私たちに希望はあるのか
揺るぎのない希望

それは変わることのない永遠の神と友情を結ぶことにある

愛の神は 今もあなたを愛し、あなたを求め

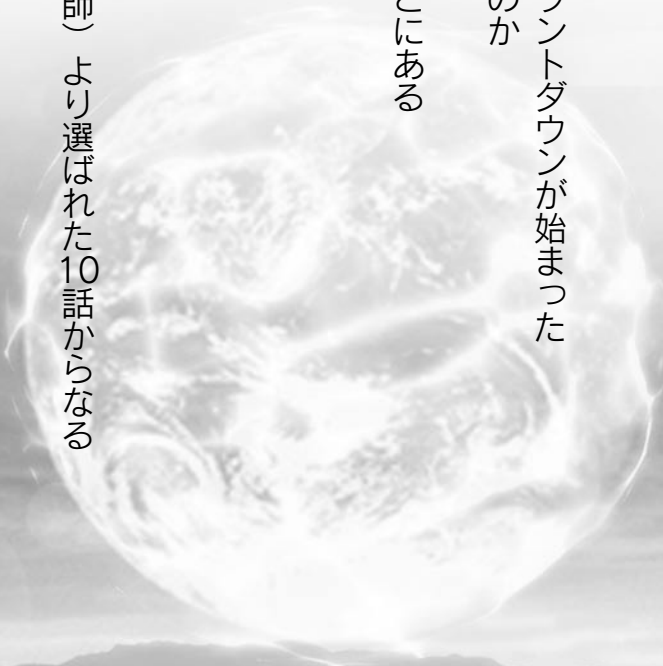
友情の手を差しのべておられる

このカウントダウンシリーズは

一九九八年全世界に向けて放映された

ネット98セミナー（講師ドウワイト・ネルソン牧師）より選ばれた10話からなる
本シリーズを通して、

読者が神との永遠の友情を結ばれることを心より祈るものである



ダーウィンの ブラック・ボックス

ダーウィンの進化論をくつがえ覆すもの

「私たちが住んでいる現代社会は、世界を創造された神の話になど、ほとんど耳を貸しません。私はそのことをよく知っています。」

もし読者のみなさんが、「聖書の神は、愛に満ちたやさしい神なんだ。人間を友だちと思ってくださるお方なんだ」などと言おうものなら、たちどころに周囲の人から反論されるでしょう。「神だって？ ばかばかしい！ 私たちはもう何十年も、神なんか必要とせずに生きてきたじゃないか。だいたい、創造についてのくだらない話は、一五〇年も前にチャールズ・ダーウィンが神話にすぎないと証明

したんだよ！」と。本当でしょうか？

実は、私の手元に一つの独創的な発明品があります。これはダーウィンが唱えた進化の仮説——地球上の生命は、数十億年という長い年月の間に漸進的ぜんしんに進化したという説——に真っ向から挑戦するものなのです。と同時に、当然ながらこの発明品は、創造主なる神の存在を明白に証拠づけるものでもあります。ただし、この独創的な発明品をご紹介します前に、まずダーウィンが書いた有名な『種の起源』の中から、非常に冷静な彼の予告を読んでおきましょう。

「もし引き続き多数の微小な

変容によって形成せられ得ない何等なんらかの複雑な器官の存在することが証明せられれば、私の理論は全く根底から覆されてしまわうだろう」（堀伸夫訳『種の起源』）

もう少しわかりやすく言い換えると、こういうことです。

「私、ダーウィンの理論は生命の漸進的進化に関するものであり、より具体的に言えば、化学反応のごく微小な刺激が何十億年も続くうちに今日地上で見られるような複雑な生命体を生み出した、というものである。もしだれかが、ある器官があまりにも複雑なので、引き続き多数の微小な変容によって長年の間に形成されたものではないことを明らかに示すことができれば、私の理論は根底から全く覆



されてしまうであろう」

果たして、ダーウィンの理論を根底から覆すようなことが見

つかったのでしょうか？ その説明は、のちほど優秀な生化学者マイケル・ビーヒにしてもら

おうと思いますが、彼の答えを聞く前に少し寄り道をさせてください。

最小限の複雑さによってできているシステム

この独創的な発明品は、妻のカレンが台所で一人で働いていた記念すべき日以来、わが家の周囲に置かれていたものです。

その生き物を見るや否や、カレンは反射的に力まかせの行動に出たのです。そして、このあわれな生き物は、探検のための遠征途中だったと思うのですが、ただちに退却してゆきました。

その日、夢中で仕事をしていたカレンは、たまたま戸棚の隅に目をやったとき、ハツとしました。床板の隅に以前はなかった穴があいており、その穴から灰色の毛でおおわれた小さな動物が姿をあらわしていたからです。生物学の分類に従えば、ネズミ科のハツカネズミ属に属するもの、俗に言う小ネズミでした。

その日以来、カレンはわが家のネズミの見張り番となり、ガレージの周りにこの独創的な発明品を置くようにしました。ネズミがガレージのほうからやって来るからでした。この発明品とは「ネズミ取り器」のことです。

ダーウィンの ブラック・ボックス

さて、ようやく生化学者のマ
イケル・ビーヒと彼の著書『ダ
ーウィンのブラック・ボック
ス』に話を移し、このネズミ取
り器について説明してもらいま
しょう。

みなさんがよくご存じのネズ
ミ取り器は、五つの部品からで
きています。つまり、木の平板、
ハンマー、スプリング、支え木、
それに引き金です。この装置は
とても簡単に取り付けられるよ
うに工夫されており、しかも作
動すると、しつかり獲物を捕ま
えられるようになっていきます。

ところで、このネズミ取り器
が、ダーウィンの進化論とどの
ような関係にあるのでしょうか？
ネズミ取り器は、マイケル・
ビーヒの言う「最小限の複
雑さ」を示すすぐれた実例なの

です。彼は、「最小限の複雑さ」
とは何かについて、このような
定義を記しています。

「最小限の複雑さとは、基本
的な機能に役立つための、よく
適合し、相互に関連するいくつ
かの部分から成り立っている独
自のシステムを意味する。これ
らの部分のどれ一つを取り除い
ても、そのシステム全体がうまく
作動しなくなるのである」
（『ダーウィンのブラック・ボッ
クス』）

このことを、ネズミ取り器を
例に取ってご説明しましょう。
ネズミ取り器は、改めて言うま
でもなく、ネズミを捕獲する
という基本的な機能を持っていま
す。しかし、部品のどれ一つが
欠けていたとしても、その機能
を果たせません。木の平板が欠

けていても、ハンマーが欠けて
いても、あるいはスプリングや
支え木や引き金が欠けていても、
ネズミを捕まえられないのです。

ネズミ取り器は、最小限の複
雑さによつてできているシステ
ムで、それがきちんと作動する
には、すべての部品の働きが必
要です。いずれかの部分が欠け
ても、システム全体がうまく作
動しない原因になります。しか
も、ただ一緒に働けばよいとい
うものでもありません。これら
の部品は正しい材料で作られ、
しかも正しい位置に設置されて
いなければならないからです。

ネズミ取り器がうまく作動す
るために、漸進的進化は必要で
はありません。と言うより、最
初から五つの部品が正しい材料
でできていて、正しい位置に設

置されていなければならぬの

です。

主が仰せおおになると、
そのように成った

このネズミ取り器についての説明が、どのようにダーウィンの進化論と関係しているのでしょうか？ マイケル・ビーヒは、あらゆる点で関係がある、と言います。

冒頭で見たように、ダーウィンは、「もし引き続き多数の微小な変容によって形成せられ得ない何等かの複雑な器官の存在することが証明せられれば、私の理論は全く根底から覆されてしまうだろう」と率直に告白しました。そこで、生化学者マイケル・ビーヒは、次のような質問を念頭に置きながら分子生

学の研究をしたのだそうです。

「自然界にはネズミ取り器のような最小限の複雑さを持つシステムが存在するだろうか？ つまり、部分ごとに個別に進化してできあがるのが不可能と思われるようなシステムが存在するだろうか？」……

マイケル・ビーヒの驚くべき例証による説明を見る前に、まず神が世界をお造りになつたときの描写を聖書で調べてみましょう。詩篇三三篇です。この描写は、創造論者でもなく、神を信じてもないこの生化学者に

よって確証されている、と私は信じています。

「御言葉によつて天は造られ／主の口の息吹いぶきによつて天の万象は造られた。／主は大海の水をせき止め／深淵の水を倉に納められた。／全地は主を畏れ／世界に住むものは皆、主におのく。／主が仰せになると、そのように成り／主が命じられると、そのように立つ」（詩編三三編六〜九節）

この聖句によれば、創造主なる神は、生命のすべてのシステムを瞬時に、しかも同時に創造なさいました。ご自身の言葉による命令で、神は最小限の複雑さを持ったシステムを創造されたのです。これらのシステムは、一気にすべてが作動するようになっていました。つまり、部分



ごとに進化することなど到底不可能な、最小限の複雑さを持った生物学的、分子的システムが、最初から存在したわけです。繊細な生命のシステムが働き始めるためには、あらゆる部分が最初から正しく設計され、正しく設置されていなければならなかったのです！

もう一度くり返しますが、ピーヒは創造論者ではありません。神を信じている、とも彼は言うていません。しかし、一人の科学者として、ダーウィン論者たちに対し、最も基本的なレベルの生命には知的計画性があるという分子的証拠が存在するのだと挑戦しているのです。

せんもつ
繊毛が曲がりくねるには……

それでは、具体的な例証を見てゆきましょう。

次のように書いています。

【例証一】 繊毛

ある種の単細胞動物は、一本またはそれ以上の繊毛によって動きます。繊毛は顕微鏡によってしか見えないほど小さなものですが、だからと言って決して単純ではありません。ピーヒは、

「繊毛は細胞膜によって覆われた動物繊維の束によって成り立っている。ちょうどプラスチックのカバーのようなものと考えればよいが、この繊毛の膜は、細胞膜が成長したもので、繊毛内部は細胞内部と連結しているのである。繊毛を輪切りに



してその切断面を電子顕微鏡で見ると、切断された末梢まつしようの部分の周りに九つの棒のようなものが見える。これらは微小管と呼ばれる。精密写真で注意深く調べると、この微小管は二つの輪が一体になってできあがっているように見える。さらに詳しく調べると、一つの輪は、それぞれ別個の一三本のDNA鎖でできていることがわかる。もう一つの輪は一〇本の鎖でできているが、それが最初の輪と結びついているのである。……ネキシンと呼ばれるタンパク質が結びつけている」(『ダーウィンのブラック・ボックス』)

絨毛の動きを二本の釣り竿さおでたとえると、こういうことになります。しなやかな二本の釣り竿があるとしましょう。これら

は、絨毛の中の二本の微小管をあらわします。釣り竿は釣り糸(ネキシン繊維)で結びつけられています。そこで、一本の竿を動かすともう一本のほうも動いて曲がるわけです。釣り竿の場合、私たちが腕で動かすこととなりますが、絨毛はダイニンと呼ばれるモーターに代わるもので動きます。そして、モーターのエネルギである電気やガソリンに相当するものは、ATP(アデノシン三リン酸)と呼ばれるものです。つまり、ATPによってダイニンが動き始めると、微小管の一本が他の一本をずらし始めます。その際、ネキシン繊維は微小管が動きすぎないように作用し、こうして曲がる動きが生じるというわけです。

ダーウィンの ブラック・ボックス

繊毛がすばやく、なめらかに動くためには、九本の複合微小管がすべて一斉に、調和して動く必要があります。ネズミ取り器の各パーツと同様に、先に述べたどれ一つでも欠けてはならないのです。それゆえ、繊毛は「最小限の複雑さ」を持つものである、と結論づけることがで

眼が光に反応するには……

【例証二 眼】

二番目の例証となるものは、複雑な器官として昔から注目されてきたシステム、眼です。これもまた、ダーウィンにとって問題になるものでした。

ダーウィンは、極めて単純な眼から複雑な人間の眼に至るまでの変化の過程を説明すること

きます。そして、この種のものの存在が、漸進的進化を唱えるダーウィンの仮説に強力な一撃を喰らわすのです。

このような組織体は、ある意思を持つ者によつて、最初から完全に機能するように計画され造られなければならなかったはずです。

なく、多種類の動物の眼について議論したのち、自然淘汰によつて漸進的変化がもたらされたと言いました。たとえば、クラゲの眼のような単細胞で光に反応するものから、ヒトデの眼のように凹形おうがたグループに属して光に反応するもの、カタツムリの眼のように未完成のレンズを持

つ球状細胞のもの、さらには鳥や人間が持つ高精度の眼にいたるまで論じています。そして彼らは、眼のような複雑な器官は幾

主が仰せになると、
そのように成り
主が命じられると、そのように立つ

世代にもわたってゆつくりと有益な変化を蓄積する必要があり、一世代のうちに突然出現するならば、それは奇跡に等しい、と主張しました。

進化の道は、ただ光に反応するごく単純な眼から始まって、人間の眼のように精巧なものへと導いたのだ、と彼は読者を強引に説得しようとしたのです。しかし、その出発点となる光に反応するだけの単純な眼が、そもそもどこからできあがつてきたのかについては説明せず、このような質問を次のような言葉で一蹴いちしやくしたのでした。

「神経がどのようにして光に反応するようになるのかといった質問は、生命そのものがどのようなにして始まったのかという質問と同様に、私たちにはほと

んど関心のないものである」

しかし今日、生化学は眼というブラックボックスの中をかいま見せてくれるようになりました。いったいどのようなことがわかってきたのでしょうか。ピ―ヒは次のように書いています。

「光が網膜に当たると、網膜分子が反応し、ただちにその形を変える。網膜分子の形が変わると、その分子に密着しているロドプシンというタンパク質の形も変わる。ロドプシンの形が変わると、それが原因でトランスデューシンという第二のタンパク質に引きつけられる。これが起こると、トランスデューシンは小さな分子を手放し、その代わりに第二のタンパク質と少し異なる分子を取り込む。こうしてトランスデューシンは、第

三のタンパク質であるホスホジエステラーゼと結合する。このホスホジエステラーゼには、陽電気の性質を持つナトリウムイオンの数を減らす第三の分子を切断する力がある。その結果、細胞膜の内外にあるナトリウムイオンの陰と陽の電氣的不均衡状態が起こる。電氣的不均衡状態をもとに戻すために充電されることになり、その電気が視神経に伝えられ、脳がそれを視覚として受けとめるのである」
（『ダーウインのブラック・ボックス』）

このあと、脳の内部で視覚を生じさせるためにどのようなことが起こるのかについては、それ自体が驚くほど複雑なのでここでは触れないでおきましょう。いずれにしても、視覚に關す



るブラックボックスが開かれ始
ます。

めたいま、一九世紀にダーウ
ンが主張し、今日でも進化論者
が言い広めているような、眼の
解剖組織的構造のみによる進化
論の説明では、もはや視力を考
えるには不十分なのです。ダー
ウィンが考えた解剖組織上の各
段階や構造などは、あまりにも
単純すぎます。この点に関して、
ビーヒは次のように書いてい
ます。「ダーウィンは、孤立した山
から他の山へと比喩的ジャンプ
で簡単に跳び越えようとしたが、
注意深く機械で調べると、多く
の場合山と山との間にはヘリコ
プターでしか渡ることのできな
いほどの開きがあつて、それは
巨大なジャンプとなることが判
明したのである」（『ダーウィン
のブラック・ボックス』）

ホソクビゴミムシが
酸を噴出するには……

【例証二】ホソクビゴミムシ
です。

ビーヒはもう一つの例を持ち
出します。これは、創造論者た
ちにもなじみ深いもので、ホソ
クビゴミムシという一センチち
よつとの小さな黒っぽい甲虫
この虫は、身を守る独特の方
法を備えていることで知られて
います。体のお尻にある穴から、
やけどを負わせるような酸を敵
に向けて噴出するのです。強力



な酸を持つていながら、自分の体は何ともありません。どのよ
うな仕組みになっているのでし
ょうか？

その答えは、この虫が化学を
利用するということです。ビー
ヒの説明を読んでみましょう。

「虫の腹の中にある特殊な分
泌腺によって、過酸化水素とヒ
ドロキシシンという二つの物質が
造られる。この二つの化学物質
は一緒になって一つの小さな袋
(小水疱すいほう)の中に集められる。

この二つの化学物質は一緒に混
ぜ合わされると爆発的反應を示
すのであるが、それも特殊な一
つの酸素からなる触媒しゅばいの影響
があるときのみ限られていた
のである。触媒とは化学物質の
一種で、それ自体消費されるこ
となく、化学反応の割合を変化

させることができるものである。
この触媒がなければ、過酸化水
素とヒドロキシシンの間の反応は
低く抑えられているので、生き

物「ホソクビゴミムシ」には影
響がない。身に危険が迫ると、
虫は、小水疱の中にそれまでた
められていた混合物質を体内の
爆発室の中へと送り込む。それ
と同時に、周囲の分泌腺から爆
発室の中に触媒が噴出されるの
である」(『ダーウィンのブラッ
ク・ボックス』)

この複雑な防衛システムは、
どのようにしてできあがったの
でしょうか？ 進化論者のある
人たちは、「必要な物質が体内
のいたるところで必要に応じて
利用された結果だ」と言います
が、その考え方は、「自動車は
自動車廃棄場で生産される」と

ダーウィンの ブラック・ボックス

言っているのに等しいのです。なぜなら、自動車のあらゆる部品は廃棄場のいたるところにありますから。しかし現実的には、廃棄場から自動車が生まれることはあり得ません。

事実、このホソクビゴミム

血液が凝固するには……

【例証四】血液凝固

動物の体の最も複雑なシステムの一つは、血液凝固の過程です。小さな傷はすぐに出血が止まるので、私たちの多くはこの過程のことをふだん気にしていません。血が止まるという奇跡的な働きに、注意を払っていないのです。

血液凝固のシステムが体の他の部分を損なわずに働くために

シには、最小限の複雑さによってできている不思議なメカニズムがあつて、それらは、いくつかの物質と構造物が正しい配置と正しい時間に作動して始めて機能するようになっている、ということなのです。

は、一定の条件が満たされる必要があります。

●出血が続かないように、まず血餅ができればなりません。
●血餅は正しい場所に形成されなければなりません。そうでないと、大切な場所への血流を止めてしまうことになりかねないからです。

●血餅は正しいときに形成されなければなりません。つまり、

それが必要な危機的瞬間にです。
●できあがった血餅は、内部からの圧力に耐え得るほど強いものでなければなりません。

ビーヒは、血液凝固のシステムを、次々に倒れるドミノになぞらえています。つまり、一連のできごとが連鎖的に次々と起こって最終的に達するというわけです。この複雑なできごとには、例えば次のような化学物質が関係します。フィブリノゲン、トロンピン、アクセリン、プロアクセリン、カリジン……など。

もう一度ビーヒから引用しましょう。

「動物に傷がつくと、ハーゲマン因子と呼ばれるタンパク質が傷口付近の細胞の表面に貼りつく。するとハーゲマン因子を

取り囲むように、今度はHMKと呼ばれる一種のタンパク質がからみつき、ハーゲマン因子を活性化する働きを始める。すると活性化されたハーゲマン因子は、プレカリクレイン、さらにはその活性化したカリクレインと呼ばれるもう一つのタンパク質を転化させる。このカリクレインはHMKを助け、ハーゲマン因子がさらに活性化した形になるように転化を促進する。活性化したハーゲマン因子とHMKは一緒にあって、PTAと呼ばれるもう一つのタンパク質が活性化した形になるように働きかける。すると活性化したPTAは、コルベルチンと呼ばれるもう一つの活性化したタンパク質と一緒にあって、今度はクリスマス因子と呼ばれるもう一つ

のタンパク質に作用し、その活性化のために働く。最後に活性化したクリスマス因子は、抗血友病因子（これ自体は、プロアクセレリンのときと同じ方法でトロンビンによって活性化されている）と一緒にあってスチュアート因子を活性化する……」（『ダーウィンのブラック・ボツ

知的な立案者が存在する

以上の生化学的例証に基づいて、マイケル・ビーヒが下している結論はどういうものでしょうか？ 彼はこんなたとえでその結論を語っています。いま、部屋の中にパンケーキのように押しつぶされた人の体が横たわっているとしましょう。大勢の刑事が虫メガネを持って床の上

クス」

この引用文の内容をそのまま理解できるのは、血液の専門家だけではないでしょうか。しかもこれらは、血液凝固のシステムの一部にすぎないのです。どれほどこのシステムが複雑なものであるか、おわかりいただけますか？

を這い回り、犯人の手がかりを探しています。ところが死体のすぐ脇に、大きな灰色の象が立っているのです。

「生命の成長について説明しようとする部屋いっぱい科学者たちの中に、一匹の象が立っているのである。象には『知的立案』というラベルが貼られて



いる。知力を持っていない原因にのみ研究対象を制限しようと思っていない人にとつての率直な結論は、多くの生化学的システムは立案されたものである、というものだ。それらは自然界の法則によつて立案されたものではなく、また、偶然や必要によつて立案されたものでもない。むしろそれらは計画されたものだ。……地上の生命は、その最も基本的レベルにおいて、その最も重要な構成において、知的な活動の産物である。……現代の生化学が細胞の中に見いだした驚くばかりの複雑さを前にして、科学界は身がすくむ思いをしている。ハーバード大学の中にも、国立医療研究機関や科学研究所の中にも、ノーベル賞受賞者の中にも、織毛や、視覚や、

血液凝固や、その他の複雑極まりない生化学的過程が、ダーウインの理論に従つて成長してきた、と説明できる人は一人もいない。しかし、現実に私たちはここにいる。植物や動物もここにいる。複雑なシステムがここにあるのだ。これらのすべてはいずれにせよ、ここに存在している。ダーウインの理論に従つてでないとするれば、ではいかにしてか？」（『ダーウインのブラック・ボックス』）

ここに、「知的な立案者が存在する」という説得力のある説明が含まれています。ピーヒ自身は、この立案者がだれであるかを明らかにしていませんし、その方を追求していません。彼は創造論の立場を取っていないのです。彼はただ、知的な立

案者が完全にととのつた細胞を立案し、将来の生命体のために必要なあらゆるシステムを備えたこの細胞を、進化の旅の出発に当たって設置したのだ、と述べているだけなのです。

しかし、彼の主張の要点ははつきりしていません。すなわち、知的立案者がまず最初に最小限の複雑さをもったシステムを開始しなければならなかった、ということなのです。

神の力は被造物にあらわれている

ではクリスチャンとして、こ

うか。

れらの生化学的結論に対し、どのように考え、反応したらよいのでしょうか？ 私自身はマイケル・ビーヒの本を読んで大いに感動させられました。そして、

「主が仰せになると、そのように成り／主が命じられると、そのように立つ」（詩編三三編九節）

聖書の冒頭にある深遠な宣言——「初めに、神は天地を創造された」（創世記一章一節）を強く支持する者として、彼の発表を受け入れたいと思うのです。詩編記者は何と書いていたでし

最小限の複雑さを持つシステムは、知的立案者による以外に決して存在し得なかったのです。事実、二〇〇〇年前にビーヒの主張と同じことが聖書には預言されていました。キリスト教の大宣教師だったパウロは、こう

何もないところから、
神はあなたの内に、あなたの人生に……
最高に美しいものを
造ることがおできになるのです

ダーウィンの ブラック・ボックス

書いています。

「神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができません。従って、彼らには弁解の余地がありません」(ローマの信徒への手紙一章一九、二〇節)

つまり、パウロはこのように言っているのです。ピーヒも、あなたも、私も、創造には知的立案が必要であるという結論を出さざるを得ないし、創造主と呼ばれる知的立案者の存在を否定できないのだ、と。

私は、ダーウィンのブラッ

ク・ボックスが、期せずしてクリスチャンの信仰を確証し、弁明するものになった、と信じて

います。そしてこのことは、あらかじめ聖書の中に記されているのです。

神は無から美しいものを創造される

読者のみなさんの中には、自分の命や人生が複雑すぎる、と感じておられる方はいないでしょうか。あまりにも複雑で、あまりにも混沌としているので、みなさんを襲っている痛みや、苦しみや、孤独に対する計画も全体像も見えずに、いま不安と挫折を味わっておられないでしょうか。そしてある人は、自分の命や人生をコントロールし、導いてくださる方がどこかにいないものか、と捜し求めておられるかもしれませんね。

この混沌とした私たちに、計

画と希望を与え、命を取り戻す言葉を語りかけてくださるお方。言葉をもつて私たちの心をもう一度取り戻させてくださるお方。そのようなお方がいらっしゃるのです。

二〇〇〇年前、罪責感に打ちのめされていた中風患者ちゆうふうの若者に向かつて、イエスは言われました。「息子よ、あなたの罪はゆるされた」と。絶望的な病気に打ちのめされていたあわれない女性には、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った」と言わ



れたのです。イエスは、男性を包み込む言葉を語り、女性を癒す言葉を語り、こうして彼ら二人をもう一度造り変えられたの

でした。

「主が仰せになると、そのように成り／主が命じられると、そのように立つ」（詩編三三編九節）

このような言葉による神の創造を、神学用語で「命令〈言葉〉による創造」といいます。が、神の創造に関して、もう一つの用語も用いられます。それは、「無からの創造」というものです。これこそ、神が始めになされた創造でした。神は、何も無いところから美しいものをお造りになったのです。

そして、読者のみなさんはこのことをご存知でしょうか？神は、現在でも「無からの創造」がおできになるのです。

カルバリの十字架を感謝しましょう。同じ創造主が、同じ創

造の言葉を、あなたの混沌とした心にいま語りかけてくださるのです。何も無いところから、神はあなたの内に、あなたの人生に、きょう、いますぐにでも、最高に美しいものをお造ることがおできになるのです。

宗教改革者マルチン・ルターは、かつてこのように言いました。

「神は何も無いところに創造なさった。あなたが何も無い状態でない限り、神はあなたの内に何ものかをお造りになることはできない」

いまこそ、私たちは自分の内に何も無いことを認め、そして神に捧げ尽くして何もなくなつたところに、「美しいものをお造りください」と神にお願いすべきではないでしょうか。

- 1 タイタニック 次は私たちか？
- 2 スター・ウォーズ 反逆者はだれだ？!
- 3 過去の文明はなぜ崩壊したのか
- 4 十字架上で破れた2つの心臓
- 5 豹はまだらの皮を変えられるか？
- 6 ダーウィンのブラック・ボックス
- 7 創造主からの時間の贈り物
- 8 あなたのルーツを心に！
- 9 11番目のシナリオ——希望はあるのか？
- 10 新しい祈り方——救い主を見つめて



著者 Dwight Nelson (ドウワイト・ネルソン)

東京で宣教師の息子として生まれる。米国アンドリュース大学神学修士、同大学神学院より博士号を修得。現在アンドリュース大学パイオニア・メモリアル教会の主任牧師、説教学の非常勤講師。著書多数。本稿の元になったNET98セミナー（衛星放送による世界規模伝道集会）講師。

翻訳 山地明（やまじ あきら） SDA都城キリスト教会牧師

校閲 文章工房・句読点

カウントダウンシリーズ 6
ダーウィンのブラック・ボックス

2000年1月15日 初版発行

セブンスデー・アドベンチスト教団教会活動部

〒190-0011 東京都立川市高松町3-21-8

電話 042-526-6822

FAX 042-526-6301

 永遠の友情の発見
セブンスデー・アドベンチスト教団